

ヴィルヘルム・クレムの詩

— 詩人と戦争 —

宇 京 早 苗

ヴィルヘルム・クレムが1968年1月23日にヴィースバーデンでその生涯を閉じたとき、『南ドイツ新聞』⁽¹⁾に追悼記事が掲載されたが、その見出しは「『人類の薄明』の詩人ヴィルヘルム・クレムの死に寄せて」となっていた。また、それから十年余りも経った1979年にハンス＝ヨーゼフ・オルトアイルがクレム研究書⁽²⁾を上梓したが、その表題も「ヴィルヘルム・クレム『人類の薄明』の詩人」となっていた。たしかに、クレムの詩は、あの表現主義の代表的詩人23名の合計275編の詩を収集したアンソロジー『人類の薄明 — 最近の詩歌の交響曲』(1919年刊)に、W. ハーゼンクレーヴァーの場合と同じく19編収められており⁽³⁾、その数はFr. ヴェルフェルの27編、A. エーレンシュタインの20編に次いで三番目に多い。

しかし、『人類の薄明』に収められているその他の詩人については、「『人類の薄明』の詩人」といった紹介の仕方はほとんど為されていない。それでは、なぜクレムの場合、『人類の薄明』が発行されて50年以上経ってもなお、「そのアンソロジーに収められている」という事柄を引き合いに出して紹介されていたのだろうか？その理由の一つは、クレムが1922年以降、ドイツの社会および文学界において沈黙してしまったことにあった。

ヴィルヘルム・クレムは1915年に最初の詩集『栄光！ — 戦場からの詩』を発表したあと、1916年には『詩と絵』を、1917年には（1914年から1917年までに書いた詩を集成した）『要請』を、1919年には『感動』と『発展』を、1920年には『夢の破片』を、そして1921年には『魔法をかけられた目標』をというように、1915年から1921年の間に実に精力的に合計7冊もの詩集を次々と発表した。そのみならず、その間には表現主義の運動を推進していた雑誌である『アクション』にも数多くの詩を発表し続けた。それゆえに、クレムは1920年頃には、「きわめて才能があり、情熱的で独特の魅力をもった詩人の一人」⁽⁴⁾に数え入れられ、彼の詩は『人類の薄明』のみならず、その当時の数多くのアンソロジーにも収められた。

しかし、クレムは1922年に、彼が愛用していた葉巻の名前にちなんだ「フェーリクス・ブラジル」という筆名で詩集『悪魔の人形』を出版したのを最後に、（詩作は依然として続けていたが）詩を発表することはもとより、社会で発言することも一切止めてしまった。より正確に言えば、詩人としてのクレムは、次のような事情から沈黙することを強いられたのである。すなわち、第一次大戦の戦場から帰ったのち1919年に、クレムは書籍取次会社カール・Fr・フライシャーを引き継いでいたのであるが、さらに（義父が死去したあと）1921年に、クレーナー出版社の業務執行人になることになった。この頃から、彼の会社の幹部の間で、そうした堅実な出版社の指導者たる者が激越な詩文を世に発表することは、会社の評判を著しく損なうことになるという意見が頻繁に出されるようになった。このために、クレムは詩を発表することはもとより、文学界で活動することも断念しなければならなくなった。その上、ナチスが権力を掌握したのちは、「政治的に信用できない詩人」として帝国著作院から

追放され、これが原因で書籍取次と出版の事業からも退かねばならなくなった。こうした事情から、クレムは表現主義の詩人のなかでも「世に忘れられた存在」になってしまった。1960年代にドイツで表現主義を再評価する気運が高まった際にも、クレムの名前はもっとも普及していた文学辞典にさえ載っていなかった。

しかしながら、クレムが『人類の薄明』と結びつけて語られる場合、彼の詩は、おもに次の二つの事情から、きわめて一面的にしか理解されない恐れが生じる。すなわち、その一つの事情は、『人類の薄明』に収められている彼の19編の詩が、その四つの章に次のように配分されている状況と関係している。つまり、「落下と叫び」の章には「我が時代」、「哲学」、「明かり」、「マルヌ河畔の戦闘」の4編が、「心の覚醒」の章には「信条」、「樹」、「秋」、「補整」、「省察」、「探求」、「出現」、「憧憬」、「成熟」の9編が、「呼びかけと反抗」の章には「空想」の1編が、そして「人間を愛せよ」の章には「まえがき」、「乞食」、「感動」、「成就」、「調和」の5編が収められている。この配分の状況から詩人クレムを特徴づけるとすれば、彼は「心の覚醒」を詠い、「人間を愛せよ」という人道主義を訴えた詩人と見做されることだろう。次に二つ目の事情は、それら19編の詩の典拠に関係している。つまり、1916年に発行された詩集『歌と絵』から1編、1917年に発行された（1914年から1917年までに書かれた詩を集成した）詩集『要請』から10編、そして戦場から帰還したクレムが彼の人生の復活を願って1919年に発行した詩集『感動』から8編が採られている。このように、戦争が終結して間もなく書かれた詩の採用が割合として多いことについては、本稿のV章で詳しく述べてみたいが、そのアンソロジーの編纂者ピントゥスが掲げた編集理念と彼における表現主義の詩の解釈とに密接に関連している。

本稿では、『人類の薄明』と結びつけて行なわれることが多かった従来の解釈から離れて、クレムの詩をとくに彼の時代と戦争体験との関連において考察してみたい。その場合、この試みは、クレムの詩が内容的にも形式的にも彼が軍医として体験した戦争の進行と密接に関連して変化しているという事情を考慮して、I 第一次大戦以前、II 大戦の初期（マルヌ河畔の戦闘以前）、III 戦場の詩、IV 戦線の膠着状態、V 大戦の終結後といった時期的推移に従って進めてゆくことにしたい。

I. 第一次大戦以前

クレムの詩人としての活動は1908年頃から始められた。1881年にライプツィヒで書籍取次業を営む家庭の第一子として生まれたクレムは、その地で高校卒業試験を終えたあと、キール、エアランゲン、ミュンヘンで医学を学んだ。そして、1905年に国家試験に合格し、外科病院に勤務することになったが、1908年に父親が死去したため、父親の会社「書籍取次オットー・クレム社」を引き継ぐことになり、勤務医の生活を中断した。これによって、時間の余裕もできたので、クレムはイブセン、ストリンドベリ、ハウプトマンなどの作品を読み、ハイネの詩の言語を分析し、さらにボードレールやヴェルレーヌの詩の翻訳も行った。⁽⁵⁾ 1908年には、新ロマン主義的な特徴を表した詩が、一般に広く読まれていた政治風刺的な雑誌『ジンプリチシムス』に、また1911年には、当時の主要な文芸雑誌『ユーゲント』にも掲載されたが、これがクレムにとって、詩人としての生活を開始する重要な第一歩になった。そして、1912年には、出版人の娘で詩人でもあったエルナ・クレナーと結婚した。エルナは早くからクレムに豊かな詩的才能を認め、クレムの詩作活動に理解と協力を示した。クレ

ムはエルナとの結婚を契機にいっそう詩作に励むようになり、1914年1月には表現主義の運動に重要な役割を果たしていた雑誌『アクツィオン』に詩を発表し、さらにその年の6月には『アクツィオン』の同人が集まる朗読会に出席して、彼の詩を朗読するようになった。

この頃、おもに『アクツィオン』で発表された詩においては、急速に発展する都市、そこに渦巻く人間の群れ、その街角に立つ貧しい人々、退廃的な夕暮の風景などを題材にして、第一次大戦前のドイツの社会と都市の生活が鮮やかに描かれている。

クレムの詩において、彼が生きる生活空間としての都市は、ちょうどヤコブ・ファン・ホディスがベルリンの都市を「ぼくは都市の照らし出された情欲をほとんど憎んでさえいる／……／このぎらぎらした照明は、以前にはなかったものだ……」⁽⁶⁾と悲嘆したように、そこに暮らす人間の神経を焼き尽くすような暴力的な照明で特徴づけられている。たとえば「空の稲光の動脈硬化した血管は／突然、マグネシウムの光を放って燃え上がる」⁽⁷⁾と、あるいは「我々の脚下で沸き立っている摺り鉢の底では／没落が悪党の顔のように黄色い光を放つなかで／人類が意味もなくごめいていた」⁽⁸⁾と詠われている。表現主義の詩人には、都市の変貌を騒音や喧騒など聴覚的に捉えた例が比較的多くみられるのであるが、クレムの場合、このように都市の脅威的な姿を強烈な照明に捉えている点で、彼が視覚に敏感な詩人であったという特徴を窺うことができる。

そして、こうした都市に生きる人間の姿は、たとえば「……邪悪な犯罪者にあふれる都市で／……／水の妖精、金髪女、娼婦らは念入に化粧をして／安楽椅子に身をうずめ、その魅力的な脚で異郷の男たちの心を誘う」⁽⁹⁾というように退廃的な面から、あるいは「乞食は無言のまま、物乞いする手の深い窪みを、／死のように黒く空虚で、苦悩のように大きな窪みを開く」⁽¹⁰⁾というように貧困の苦難から描かれている。

そして、こうした都市に暮らす人間として、クレムは生活の空虚に悩み、精神を躍動させることもない単調な日々を嘆いている。たとえば「憂鬱な夕暮」と題する詩では、「けれども、この現在は私をひどく苦しめる／ある男は抱いている最後の理想を絞め殺す／ある女は不実を憧憬する心を金で貸す／ある少年はマゾヒストの姿を空想する／……／成就をみることの無い行為のみが永久に傍らを通り過ぎてゆく／私はただひとり幽霊に取り囲まれている」⁽¹¹⁾というように、都市に暮らす人間の深い孤独と憂鬱に沈む日々が告白されている。生きる喜びも将来の希望も抱かせない都市の、窒息するほどに深刻な退屈を嘆いた詩は、次に見られるように、数多い。「聞くがいい！我々の退屈を笑う神の高笑いを／我々は気晴らしに首でもくくろう」⁽¹²⁾、あるいは「埃っぽい息苦しさのなかで、私は疲れ、老いてゆく／おお、年老いた神よ、まだどれほど長くこれに耐えることができるだろうか？／……／時間は鋸の鈍い動きで私たちを挽く」⁽¹³⁾と。こうした日々のなかで、「おびただしい回想と倦怠感のみが／私の存在である……」⁽¹⁴⁾と嘆くクレムは、(のちに題名を「我が時代」と改めた)詩「戦争以前」において、彼の時代を次のように断じる。「魂は縮んでちっぽけな複合体になる／芸術は死んだ。時間はいっそう早く巡る／おお、我が時代！名もなく引き裂かれ／星も輝かず。存在感に乏しい／おまえと同じく、この私には何も誰も現われ来ない」⁽¹⁵⁾と。G.ハイムも「毎日が相変わらずこんなふうに過ぎてゆく。実際、精神は凍り付く。これ以上、どれほど長くこうした生活に耐えることができるか分からない」⁽¹⁶⁾と日記に記しているが、若い詩人たちに生きる希望も見出させぬヴィルヘルムII世治下の社会に対して募る不満は、表現主義の詩に共通したテーマであった。

こうした現実から逃れ出たいという願望は、たとえば「我が友よ、最古の人類の子孫よ／時間の鎖エレベーターに乗って上がって来い／……／そして、古いぼろ着に持ち歩いているものをおまえから振り払え」⁽¹⁷⁾と詠われているように、先ずそうした社会に残る諸々の旧弊を打破しようという要求を生み出す。さらに、その要求は旧態依然とした自らの時代を打ち砕く戦闘を待ち望む過激な声へと変化する。こうした要求と関連して、新しい世界を打ち立てるために、現存する社会を破壊する戦争を願望する傾向が、その当時の多くの詩人において見られるようになった。たとえば、ハイムは「ふたたびバリケードが築かれるなら、ぼくはその上に立つ最初の者だろう。……戦争を始めたとしても、それは正義ではないかもしれない。だが、この平和は古い家具のワニスのように、こんなにも腐り果て、油染みて汚らしい」⁽¹⁸⁾と語り、また1911年の第二次モロッコ危機に触発された E. トラーは「我々、若い者は戦争を望んでいる。平和はつまらない。我々は大いなる冒険に憧れる」⁽¹⁹⁾と述べた。さらにまた、Fr. ニーチェは「治療薬としての戦争—もし無気力のために惨めに零落れてゆく民衆がなおも生き続けたいと望むなら、戦争は治療薬として彼らに勧めることができるかもしれない」⁽²⁰⁾と診断した。新しい社会と時代を到来させるために戦争を願望する、こうした傾向は、クレムの場合、第一次大戦が勃発する一ヵ月ほど前に『アクツィオン』に発表された詩「憧憬」において認めることができる。そこでは、「私に赤く燃える印章を、／どんな遠くの物をも繋ぎ合せる結び目を与えてください／魂の秘められた戦闘から、雄叫びを／緑の森の喉から、叫び声を沸き上がらせてください／深い谷間を閃光を放って走る火光信号を打ち上げてください」⁽²¹⁾と詠われている。「戦闘の雄叫び」、「叫び声」、「火光信号」などの言葉は、その数か月後に西部戦線へ赴くことになったクレムにおいて、早くも戦争を美化する響きをもっていた。

II. 大戦の初期（マルヌ河畔の戦闘以前）

1914年8月に第一次大戦が勃発すると間もなく、クレムは軍医中尉として西部戦線に赴いた。クレムがこの戦争を最初どのように受け取っていたかは、詩「呼びかけ」に読み取ることができる。つまり、ここでは「おお、偉大な出来事よ、想像もつかない戦争よ！／私はおまえが無数の街道を、無数の額の上を／幽霊のように美しい姿で行き過ぎるのを見る／……／おまえの香気を吸いながら、敏捷に、泥に塗れ、焼け焦げ、血を求めて／おまえの苦難を私の皺の寄った皮膚に感じ取りながら／おまえの飢餓、犠牲を厭わぬ心、忠誠心を感じながら／私はおまえの計り知れない苦痛を全身に負っている！／夢幻のような現実、おまえは私の感覚を／私の目を夜警に照らされながら駆け抜けてゆく／陸と海と民族を打ち負かしながら。けれども／私の大きく燃え広がる心は、おまえについて語らねばならない！」⁽²²⁾と詠われている。この詩において、「想像もつかない」「幽霊のように美しい」戦争は、「陸と海と民族を打ち負かす」「偉大な出来事」として讃えられている。そして、この戦争は「おまえの香気を吸いながら」、「おまえの苦難を皺の寄った皮膚に感じ取りながら」、「おまえの計り知れない苦痛を全身に負っている」と述べられているように、クレムにおいて政治的、歴史的ではなく、感覚的、身体的に感じ取られている。こうした戦争の受け取り方は、前進の途中で（数日の間隔も置かず）クレムが妻に書いた手紙に表れた「戦争に対する感情的判断」と「楽観的な勝利の予想」にも結びついている。

1914年8月～9月の手紙には⁽²³⁾、以下に見られるように、戦争を肯定し、ドイツの勝利

を堅く信じる、その当時の市民の大方と何ら変わらないクレムの愛国的態度が表れている。

8月9日：私たちの祖国にとって、事はうまく運ぶだろう……。

8月10日：我が隊の雰囲気は非常に良く、全員が勝利を確信している……。

8月12日：我が隊は相変わらず平穏である。私たちはアイフェルの深い渓谷を抜けて進んだ。何も見ず、何も聞かなかった……私たちはルクセンブルク国境から10キロメートル、ベルギー国境から35キロメートル離れた所にいる。

8月17日：今日、最初の郵便が来るといふ。もっと詳しいことが君のほうから聞けると思うと、たいそう待遠しい。負傷者など、私たちの所にはまだ出ていない。それに対して、ベルギーの夜空は数箇所火が上がっていた。昨夜は全員で「我らが神は堅固な城」を歌った。実に感動的だった。

8月21日：まもなく君は新たな勝利について聞くことだろう……。

8月28日：戦争は何ともすごいものだ。すべてを変えてしまう（トランプゲームの）ラムシュのようだ……ここには、後退ということがない……全員にみなぎる士気は衰えない。番兵たちは、ほとんど交代もせず一日中見張りに就き、疲れなど知らない。あの1813年もこうだったに違いない。今回の私たちも勝利することだろう。不調な点などどこにも見当らない。私たちは偉大な時に生きている。

ここでクレムが言及している1813年とは、ライプツィヒの戦いでプロイセン、オーストリア、ロシアの同盟軍がナポレオン軍に大勝した事件である。百年余りも前の戦争を引き合いに出して、勝利の確実性を唱えるクレムに、戦争に対する楽天的幻想を見ることが出来る。

8月29日：フランス軍が留まっている辺りが真っ赤に燃えているということだ。だから、ドイツ軍の攻撃が始まれば、パニック状態に陥ることだろう。君も私のように朗らかでいなさい。

9月2日：我が隊には、かなりの死傷者が出た……しかし、勝利は私たちのものだ……ここで、私たちはドイツ軍の素晴らしさを驚嘆と共に耳にしている……パリを目前にした集中攻撃もあまり長くは続かないだろう。私たちが再会できるのを早くも楽しみにしているよ……私がこの手紙に書いた当地の荒廃ぶりや立ち籠める腐肉臭のことなど、君は考えないようにしなさい。

この手紙が書かれて間もなく、歴史に残るあのマルヌ河畔の戦闘が起こった。9月8日にマルヌ川の線まで南下していたドイツ右翼軍は、この戦闘によって北方エヌ川へと後退を余儀なくされた。これ以来、西部戦線は膠着し、その後四年間にわたって、犠牲のみ多い泥沼のような持久戦が続けられることになった。

III. 戦場の詩

クレムが妻に宛てた1914年9月19日付けの手紙には次のように記されている。「恐ろしいほど騒然として、大変きつい日々だった。日夜、大急ぎで退却した。私たちの野戦病院でも、実にいろいろな事があった。襲撃、爆弾、榴散弾と立て続いたが、私たちはそうしたものに滑稽なほど早く慣れたよ……道路では馬の死骸が悪臭を放ち、家々は焼け崩れ、信じがたいほどひどく荒廃し、耕地は踏み荒らされ、すべてが泥に塗れて腐っている。私たちは大砲の轟く音で目を覚まし、大砲の轟く音を聞きながら眠りに就く。負傷者の悲惨さは譬えようもない……フランスとのこの戦争が間もなく終わることを私たちの全員が願っている。……フ

ランス人は私たち以上に苦しんでいることだろう」。

1914年9月にドイツ軍の慌ただし退却が始まるや否やその現場で書かれ、『アクツィオーン』の発行者Fr. プェムファートに送られた詩のうち、「マルヌ河畔の戦闘」、「戦場の夕暮」、「死」の三編が1914年10月24日発行の『アクツィオーン』で発表された。それらの詩を掲載するにあたって、プェムファートは同誌に「戦場の詩」(Dichtungen vom Schlacht-Feld) という標題を掲げた欄^{ルブリーク}をとくに設け、次のような「まえがき」を付した。「以下の詩を私は大いに満足してここに掲載する。それらの詩は、1914年の世界大戦からもたらされた最初の価値ある詩であり、最初の戦争詩 (Kriegsgedichte) である。本誌の寄稿者でもある詩人のヴィルヘルム・クレムが、軍医として留まるフランスから私に送ってくれたものである」⁽²⁴⁾。

この欄^{ルブリーク}の標題において、Schlachtfeldと書くのが普通である語を、わざとハイフンを入れて Schlacht-Feldと綴ったのは、そこに掲載される詩によって、恐ろしく忌まわしい戦場の光景が生々しく伝えられることを願った反戦運動家プェムファートの願望の反映と考えることができる。

この「戦場の詩」の欄^{ルブリーク}の冒頭に掲げられた詩「マルヌ河畔の戦闘」は、詩人クレムの名前を一躍有名にしたのみならず、優れた戦争詩の例として『人類の薄明』を初め、多くのアンソロジーにも収められることになった。

ゆっくりと石は動き、語り始める。
草は硬直して緑の金属になる。森、
低地、茂みの隠れ場所は遠方に行く隊列を呑み込む。
空は、石灰色の秘密は、今にもはち切れそうである。

長い二時間は分解して数分になる。
物影もない地平線は膨らみ、盛り上がる、
我が心臓はドイツとフランスを合わせたほどに大きく、
世界のあらゆる弾丸にぶちぬかれている。

砲列が獅子の吠え声をあげる、
六度、陸地に向けて。榴弾がうなる。
静寂。遠方では歩兵隊の火が立ちのぼる、
何日も、何週間も。

この詩において、戦争という出来事は、その場で戦闘を体験している詩人の恐怖と驚愕を通して描かれている。「石は動き、語り始める」、「草は硬直して緑の金属になる」、「森、低地、茂みの隠れ場所は隊列を呑み込む」というように、周囲の自然は突如として不気味な姿を呈する。また、「空ははち切れそうである」、「二時間は分解して数分になる」、「地平線は膨らみ、盛り上がる」というように、空間と時間は、それぞれの通常の基準を超え出て、拡大と縮小を自在に繰り返して、瞬間に非現実的な世界を作り上げる。こうした状況に投げ込まれた人間の生命は（敵であれ味方であれ）すべて、逃れようもなく死にさらされている。しかしながら、その恐怖に対して、詩人の悲嘆や憤慨は一切表されていない。戦場の様子は

「砲列が獅子の吠え声をあげる」、「榴弾がうなる」というように聴覚と、そして「遠方では歩兵隊の火が立ちのぼる」というように視覚とを通した印象の混合によって、まるでルポルタージュのように鮮明に伝えられている。この詩は、これ以後に書かれることになったクレムの戦争詩の内容のおよび表現的な特徴を早くも作詩プログラムとして示している。すなわち、クレムの戦争詩は、「マルヌ河畔の戦闘」に見られた三つの描写的特徴を、以下にその類例を挙げるように、繰り返し表しているのである。

a) 周囲の自然の不気味な変貌

「毎朝、日は太陽を／血塗れの子供を空へと持ち上げる」⁽²⁵⁾

「月は手にした松明を黒い運河にひたす／……／月は離れ行き、風がその明かりを消し去った／かすかな呪い。夜の復讐が我々をむさぼり食う」⁽²⁶⁾

「雲が、空の腸はらわたがこちらに垂れ下がり／ゆっくりと悲しげに大地を滑って行く」⁽²⁷⁾

b) 死に直面した極限状況

「我々が寒さに震えて横たわるひもじい夕暮に／我々のなかに明日死ぬ者が何人かいる／ある者は頭を吹き飛ばされた／あそこには一本の手がぶらつき、ここには足をなくした体が泣き叫ぶ／ある大尉は胸の真ん中に弾丸をぶちこまれた」⁽²⁸⁾

「唇には血の泡がわずかに残っていないか？／おまえの手足は硬直し、冷たく、とても重い／これがいわゆる死後硬直なのだ」⁽²⁹⁾

「どの村もどの町も、黒い廃墟から悪臭が立ち籠め／死人がまるで人形のように前線の間横たわる」⁽³⁰⁾

c) 知覚による戦闘現場の再現

「遠くで銃火が咳払いをする／そして今、大砲は地平線を爆破する／目には捉えられない大気の大像が／叫び、打ちひしがれて泣き喚き、破裂する／榴散弾は、豹の背中のように／空に斑点を付ける」⁽³¹⁾

「砲声の本気になって轟いた。河の上へ／もつれた騒音が押し寄せた。銃火は泣き喚いた／方々で榴散弾がはじけた」⁽³²⁾

「大砲が赤い火を放った。月の下で／榴弾の星が破裂した—そして、寂しく音を消した／小さな炎がきらめいた」⁽³³⁾

内容のおよび表現的にこうした特徴をもつクレムの戦争詩について、Th. ホイスは次のように述べた。「戦争というものが実に身に迫って感じ取られるが、それはたんに戦争の騒音、危険、苦痛、静寂、風景、夜、火災、破壊によってのみならず、またそれらのものが（政治的体系へ移されたり、たんに記述されたりすることなく）荒れ狂う力で、詩人の開かれた魂を満たしているからでもある。これによって、クレムの戦争詩はその形式においても、その内容においても非常に豊かなものになっている。言語的表現もきわめて直接的で、肌伝に伝わってくるような感じを受ける。数編の詩に見られる暴力的で幻視的な要素も、詩人が体験する諸々の事柄の勢力と色彩と大きさによって生彩をおび、変化する。不気味で脅威的な事象も、自然の強烈さと鋭さのなかで自ら変貌を遂げてゆく。……しかしながら、精神的領域では、戦争に熱狂した詩人たちに見られる、軽率に大言壮語する態度とは無縁の姿勢が明らかになっている」⁽³⁴⁾。そしてまた、戦争をテーマにした詩を収集し、それらに歴史的な解釈を施している Th. アンツは次のように語っている。「大量殺戮と塹壕の中の生活を描くことによって、クレムの戦争詩はその当時、戦争を弁護していた文学の英雄的な身振りと

愛国主義的な意味付けを根本から揺さ振った。榴弾痕に満ち、鉄条網に囲まれた前線の光景、自然が荒廃し、村が崩壊する前線の風景は、クレムの詩のなかで「死の世界」として立ち現われている。……前線兵士の行動から直接的に伝えられる戦場の有り様は、国家の解釈に基づく戦争の英雄的意味づけに抗するものである⁽³⁵⁾と。

戦場を詠ったクレムの詩において、上に挙げた三つの特徴のなかでもとくにb)の「死に直面した極限状況」が、次の例にみられるように、次第に強く訴えられるようになる。

「今や、毎日が死亡の日であり厳粛な日である／夜はいつそう深く血を流し／死に果てた心臓を通り過ぎて行く」⁽³⁶⁾

「死は、降り始める雨と同じくらい冷淡である／昨日、今日、明日は一体、誰を気遣うのだろうか？」⁽³⁷⁾

「おお、命中する人間を探し求めている弾丸よ、おまえはいつ私の所へやってくるのか？」⁽³⁸⁾

「日に何千回と息を吐く生命よ／おまえは、まだ呼吸している我々のもとに束の間でも立ち寄るだろうか？」⁽³⁹⁾

こうした死の不安と共に、今やクレムの精神と肉体を支配する「苦しみ」(Qual)も、以下に見られるように、次第に多く語られるようになる。

「無数の野蛮な幽霊が軍隊を追い立てる—／一緒に来い！と囁く声。おまえは何を望むのか？戦争がどのように終結するかは神のみが知る—／死を愛せよ！傷口がにや笑う！苦しみが棒立ちになる！」⁽⁴⁰⁾

「苦しみの集積が我々を包囲した／……／疫病の巣である我々の体は背を丸めて地を這って行く／名誉を奪われた我々の魂は気が狂ったようににや笑った」⁽⁴¹⁾

IV. 戦線の膠着状態

先に述べたように、戦線は四年間にわたる膠着状態に陥った。クレムの詩において、この状態は「大砲の轟きに我々はとうに慣れてしまった／日々は数えられることもないままゆっくりと過ぎて行く」⁽⁴²⁾、「数年が数時間のように靄にけむる」⁽⁴³⁾、「歳月と歳月が交差する」⁽⁴⁴⁾というように、歳月や時間が区切りもなく、意識に上ることもなく過ぎてゆく経過で表されている。こうした状況にあって、戦争はもはやクレムにとって、初期の前進中に感じ取ったような「偉大な出来事」ではない。そのような幻想はとうに消え失せている。今や戦争は、「死にゆく者の目は、世界と我々の地獄じみた営みを赦している」⁽⁴⁵⁾と詠われているように、「地獄じみた営み」として、また「戦争はいつも同じもの。破壊の陶酔である」と断じられているように、「破壊の陶酔」⁽⁴⁶⁾として捉えられている。この時期に書かれたクレムの詩は、内容的に i) 戦場で思案にくれる日々、ii) 憂鬱と無気力の苦しみ、iii) 守護されない存在に募る不安、iv) 生きる意欲の喪失を詠ったものが多い。以下において、そうしたテーマを分類して辿りつつ、膠着した戦線に生きた詩人の内面的世界に分け入ってみたい。

i) 戦場で思案にくれる日々

「我々は葉巻を一本、また一本と吸う／そして、たえずドイツの運命を思いわずらう」⁽⁴⁷⁾

「今やとうに何の価値ももたなくなった生が—／みな死んでゆく状況の中で—ふたたび価値をもつなどということが／どうして可能だろうか？爆音の轟く戦争の夜に、こうしたことを思いわずらいながら」⁽⁴⁸⁾

「今日、我々はなおも一緒に座って、昨日まだ生きていた者たちのことを考える／そして明日はもしかしたら他の者たちが同じように、この我々のことを考えるかもしれない／それにもかかわらず、すべては行き進む／それは、我々のそばで思いわずらっている深淵にはかならない」⁽⁴⁹⁾

これらの詩には共通して、「思いわずらう」(über…grübeln) という語句が現れている。この語句は、繰り返されるüの重い響きによって、日毎に進行する心の閉塞状態を見事に表している。

ii) 憂鬱と無気力の苦しみ

「私は恐ろしい町をよるめきながら歩いて行く／……／むく犬のような渋面をして／孤独な心に形の定まらぬ恐怖を抱きながら／夢などなく、ただ夢の恐ろしい補足しかもたず／悲しみに打ち拉がれた魂の喘鳴しかもたず」⁽⁵⁰⁾

「私は、私自身の生の物語を／疲れた単調な声で私に語る何者かと一緒に座っている／……／私の夢の巢は空っぽである／無気力が恐ろしい力で頭をもたげてくる」⁽⁵¹⁾

「一本の無限にのびる木から花卉が／落ちる……／鳥は降下し、その群れは落下する／蝶は深い灰色の谷間へ舞い下りてゆく／高い噴水から水泡が落ちる／世界のあらゆる書物は、小片に破り裂かれて／底無しの淵に撒き散らされる／……／あらゆる思考が落下し、そのあとから砂や埃が舞い落ちる」⁽⁵²⁾

上記の三番目の「花卉」と題する詩では、周囲のあらゆるものが「降下と落下」を示し、詩人の打ち沈む心模様を下降の線條で強く印象づけている。

iii) 守護されない存在に募る不安

「私は自分が暗く何も見えない無へ／入って行くのを見る。ただ一人、小さい姿で、身を覆うことなく」⁽⁵³⁾

この詩において、「身を覆うことなく」裸で無へ入って行く自分の姿に、守護されない生の実態を見たクレムは、次の「泳ぐ者」と題する詩において(陸地に、すなわち自宅に帰り着けるかどうか分からないまま)戦線という海洋に漂う自分の姿をこう詠っている。

「波と風はもうどれほど長く／私を運んでいることか？／私は二度と再び／陸地に手を伸ばしてはいけないのか／……／親切なる神よ／陸で生まれた私を運んで行っておくれ／私は陸で呼吸せねばならないのだから／神なる漁師よ／私の下に／おまえの網を張り渡しておくれ／私が波に／あるいはエイの歯で殺されないように」⁽⁵⁴⁾と。

iv) 生きる意欲の喪失

膠着した戦線に留まるなかで、次第に生きる意欲を失ってゆくクレムは、深い諦念に黒く縁取られた虚無感を詠うようになる。

「思考はゆっくりと濾過され、灰色の苦汁になる／けれども、園亭は依然として同じ姿で残る／私たちは死の葡萄酒を飲む／そして、忘却の運動につき従う／その運動は回想よりも甘美である」⁽⁵⁵⁾

この詩において、思考する一切のものが灰色の苦汁になるという状況のなかで、詩人は死の葡萄酒を飲み、それがもたらす忘却の運動につき従おうとする。この行為は、同じく第一次大戦の東部戦線に出征し、グローデクの戦場の凄惨な情景に動転し、自殺したトラークルを思い出させる。

「疲労感が夢のベッドに戻ってくる／そこは小さな絶望が錨を降ろした場所／……／私たち

は燻る火の周りに腰を下ろし／悲しいこと、あまり悲しくないことを語ろう」⁽⁵⁶⁾
この詩において、火の周りに腰を下ろして語り合うにしても、その語らいの内容は「悲しいこと、楽しいこと」ではなく、せいぜい良くても「悲しいこと、あまり悲しくないこと」（von traurigen und weniger traurigen Dingen）であるにすぎない。こうした虚無感のみが深まりゆく詩人の精神状態は、次に見るように、この時期に書かれた詩の多くに表されている。

「希望もいдаかず、弱気にもならないこと／これは真実な人間に特有のことである／私は雲が示していることを学び取った」⁽⁵⁷⁾

「私たちの存在は実を取るに足らないものなので／ほんのわずかの言葉で事足りる」⁽⁵⁸⁾

「私は、憧憬をいだきながら、年老いてゆかねばならない」⁽⁵⁹⁾

しかしながら、存在の地盤を喪失した状態に在ってなお、クレムは自らの生の発展的「プログラム」を形成しようと試みる。詩作という魔術によって現実世界から逃れ出、精神の楽園を構築するその「プログラム」は、次に詠われているように、手品の出し物のように空想を生み出す作業にはかならない。つまり、詩「プログラム」では、「私たちはポエジーなど少しも欲しくない／手品の出し物が欲しいのだ／私たちの存在に開いた不幸の隙間を／埋めようと努める。いくら努力しても、それは全然、成功しない／……／けれども、私たちが内なる魂の麻薬に身をやつして／その最上に神が住まう階段の最下の段に口づけるとき／心の密かな高揚について、至福に震える啜り泣きについて／私たちは何を知らのだろうか？」⁽⁶⁰⁾と、また詩「通り過ぎて」では、「体験すること、回想すること、忘却することがすべてだ／おお、沈黙、音をたてない混合／……／二度と帰り来ぬ偉大な愛の象徴が形成され／世界の最後の湿地と共に消え去る／空間には何もない。けれども、不死の魂は解放されている／今や、おまえは自分に気に入ることを行なうことができるのだ」⁽⁶¹⁾と詠われている。クレムにおけるこうした詩的作業を v) 魔術的逃走のための空想の形成と捉え、以下において、これをいくらか詳しく考察してみたい。

v) 魔術的逃走のための空想の形成

現実世界から逃れ出るために、また自らの存在に大きく開いた不幸の隙間を埋めるために、クレムの詩において手品の出し物のような空想が豊かに形成される。たとえば、「変化」という題名の詩では「花は風変りな背中と色とりどりの鬣たてがみをもった／動物に変化する……その動物の頭は人間の頭になる／……／その人間の頭は仮面になる。その窪みから／星が現われ出る。それらの星はきらめく潮流となって／いっそう早く落下し、深い谷間に崩れ落ちてゆく—」⁽⁶²⁾というように、形象が途切れることなく次々と鎖のように繋がってゆく。そしてまた「回想」という題名の詩では、「恐竜の黒い巨大な骨格が／頭を高く上げて突っ走る……／原始人の細い手足が日光浴する／寝室の奥に一人の女性が立っていた／弱く燃える火を通して見るような姿で／……蛇が現われた／一つの教会が、黄玉の塊の岩礁が／……／すみきった空の海に現われ出た」⁽⁶³⁾と詠われている。この詩では、太古に遡る詩人の記憶が生み出す空想が「恐竜の巨大な骨格—原始人—日光浴—（イヴと思われる）女性—火—蛇—（聖書を象徴する）教会—黄玉の塊の岩礁—空の海」というに、類推によって連鎖している。あのマリネッティーは、たとえば「フォックステリアを沸騰水に譬える」といった大胆きわまる類推を、「外見上は異種で、敵対し合い、遠くかけ離れている事物を相互に結び

つける深い愛にはかならない」⁽⁶⁴⁾と述べて、実践したが、クレムの場合は、「存在に開いた不幸の隙間を埋める」ために、空想がとにかく途切れることなく、手品の出し物のように続くことが重要と考えられた。

クレムの詩におけるこうした形象の豊かな噴出について、ピントゥスは次のように述べた。「グロテスクで暴力的な飛躍ののち、彼の偉大な才能は高貴な成熟のなかで素早く空想へと発展した。それらの空想によって、人間のさまざまな表現能力を包んでいる、あの伸縮性に富んだ紙風船は外に向かって破裂した。クレムは地上の風景からも、感覚印象や現実体験から生じる我々の意識的内容からも立ち去っている。彼の精神は、寸法も自然法則も因果関係も存在しない一つの新しい宇宙を生み出す。無数の新しい抒情詩の手段を創造しつつ、彼は抒情詩の作用を千倍化している。彼の表象の圏内は、果しない放射線を有しており、その宇宙の激動する無限性の中で、自明の確実性をもって動いている」と。さらにまた、ピントゥスはたとえば詩「事物」の三節目にとくに顕著に認められる現象として、一詩行が二、三の文章の連鎖で構成されているといった、クレムの詩の短文連結の詩行構成についても「彼の詩の各々の詩行は、それ自体で独立した詩と見ることができる。……輝きを放つこうした詩行の幾百万もが、クレムの想像世界に安らいでいるように見える。そして、それらはずかの動きによってほとんど自動的に組み合わせられ、万華鏡の色とりどりの石のように新しい形象を生み出している」⁽⁶⁵⁾と評価した。

これに対して、オスカー・レルケは、クレムの詩に見られる「形象の洪水」について、詩に表される思考が個々の形象に束の間も留まることなく、あまりにも素早く詩から詩へと飛躍することによって、その意味を消失してしまうという短所を指摘して、次のように述べている。「彼の空想は、多彩な生と軽やかで統率されない動きとに過剰に満ちている。そのために、それらの空想は、結びつきが緩く軽やかな形象をそれぞれ完全なものに成す暇をもつことができないままに終わっている」⁽⁶⁶⁾と。要するに、詩の中で形象があまりにも慌ただしく飛躍するために、たとえ個々の形象は真剣味をもっているとしても、全体としてたんなる言葉の遊戯としてしか感じられない状況を生み出しているというのである。

しかしながら、クレムは彼の詩のそうした性格を十分、承知していた。「詩行」という題名の詩では、次のように自分の詩が特徴づけられている。「長い喪服を引き摺る詩行／真ん中に腺腫をもっている詩行／絞首台の足場に突き出た詩行／酔っ払いのようによろめく詩行／……／古く、腐った葡萄酒のような臭いを放つ詩行／新しく、なお春雨の滴を垂らす詩行……／地下牢の格子のように交差する詩行／黄金の寺院のように開放的な詩行／さまざまな詩行が永遠につづく」⁽⁶⁷⁾と。さらにまた、膠着した戦線という、いわば極限状況のなかで生きなければならないクレムにとって、そうした詩は、次に詠われているように、自分を内面的に救済する方法として彼が意識的に行なった魔術にほかならないことも明白にされている。「風変わりな感情が纏れ合って固まる／ある動機が膨らみ、高まる／それと反対の動機が、飛び散るモチーフの群れが移動する／おお、生の醜いほどの粘り強さと野性的な平静さ」⁽⁶⁸⁾と。実際、クレムは「魔術的逃走」と題する詩において、そうした彼の詩作を自らを有効に欺くための試みとして冷静に位置づけている。つまり、「魚が網をくぐり抜けるように／私たちは古今の物語のトンネルを通り抜けた／……／反世界の好ましいとは言えない島々を走り回った／……／そして、私たちは一晩中、旅をしていたが／朝方に私たちの苦痛に満ちた宿舎を見出した」⁽⁶⁹⁾と。

しかしながら、クレムは彼の詩作がたんに自らを内面的に救済する魔術的逃走にとどまらず、その機能をさらに超えて、第一次大戦の時代を共に苦しみ、生きる多くの人間にとっても意味を成すものになることを願っていた。すなわち、1917年に発行された詩集『要請』の冒頭に掲げられた詩「まえがき」では、クレムのそうした詩人的使命感が次のように詠われている。「乏しい時間のなかで延び広がるもの／無関心の光なかに現われて／理解されぬまま影の闇に沈むもの／移ろい、たえず変化するもの／帰還と別離／新生と反復／個々の形式の把握とその忘却／始まりと終わりの間にはめ込まれているもの／興奮と沈静／憧憬とその成就／我々、限りある者に世界として向かい来るもの／これらのものを私はやがて消え去る言葉に捉えよう／それを読みながら、自分が生きていることを二重に知るために／同胞よ、人間よ、きみがそれを読むことができるために／それを読んで、きみが、そのとおりの、自分もまたそうだ、と同感できるために／なぜなら、私たちはみなたった一つの植物にすぎないのだから」⁽⁷⁰⁾と。この詩において、「限りある者に世界として向かい来るもの」を詩人はやがて消え去るはかない言葉であっても、言葉に捉えようとする。それを読んで、生を実感できぬまま、死にさらされている自分が「やはり生きている」ということを「二重に知ることができるために」。しかし、それと同時にクレムにおいて、そうした苦しみはただ自分一人にあるのではなく、戦争ではだれもがみな（自分と同じように）苦しみのなかに生きているという認識が生じている。それゆえに、詩を媒介として、その時代に生きる人間が苦しみを分かち合い、心を結ぶことができると信ずる期待も表されている。これに関連して、「人間」を「同胞」と呼んでいる彼の人道主義的発想は、ほぼ同じ時期に「我々はみなこの地上では他人だ／そして、我々を互いに結びつけるものは消え失せる」⁽⁷¹⁾と詠った Fr. ヴェルフェルの悲観的な世界観と対極をなすものとして注目される。実際、クレムは「哲学」と題する詩においても、「おお、謎の茂みのなかの植物体よ／おまえの最大の奇跡は希望を抱くことだ」⁽⁷²⁾という、ピントゥスによって「不確実で疎外された存在に苦しんでいる人間にとって、大いに慰めになる言葉」⁽⁷³⁾と讃えられた二行を表している。それらの詩で、クレムは人間をとくに「植物」、「植物体」に譬え、「生命は無数の甘美な根で繁殖する」⁽⁷⁴⁾と確信して、発展的な生を期待し、生きる希望を詠おうとしたのである。

V. 大戦の終結後

クレムは1918年まで軍医中尉として戦線に留まっていた。戦場から帰ってのち、1919年には書籍取次会社カール・Fr・フライシャーを引き継ぎ、またその年には三人目の息子も生まれた。1919年11月に発行されたあの『人類の薄明』のためにクレムが寄せた伝記的紹介文には、「1881年にライプツィヒで生まれ、同所で生きている」⁽⁷⁵⁾とだけ記されていた。その自己紹介文では、彼の人生に見過ごすことのできない重要な影響を及ぼした戦争体験はもとより、その他の履歴も一切、示されていなかった。1919年のこの時点、クレムはそれまでの彼の人生を総決算する時と考えたのだらう。

1919年に出版された詩集『感動』には、戦争終結後のクレムの内面的世界を描き出した詩がいくつかある。詩「熟慮」では、不幸な体験のあとで人生の復活を図る「開始」について思い巡らされている。「この何もない国土を風が吹きわたる／……／この国土を私は歩いて行く、今日4月3日に／不幸の年1919年を数える／この年を数える者は開始を必要とする／門よ、おまえは世界が開始を必要とすると思うか？／そうは思わない、分別は我々にとって

何になったか？／私は知らない、きみは知らない、我々全員が知らない」⁽⁷⁶⁾と。この詩で不幸な年と呼ばれている1919年の早春には、戦勝国が講和会議を開き、リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクが殺害され、エーベルトが大統領に選出された。この時点ではまだ、クレムは終戦後の自分の人生の「開始」に着手しようという決意には至っていない。人間の分別や理性など、戦争を前にして如何に脆く無力であったかをクレムは忘れていない。しかし、クレムは、不幸のあとにはそれを補整するものが現われ出ることを自らのために信じようとする。「没落と復活が／果てしなく手を差し伸べ合う」⁽⁷⁷⁾と語るクレムは、その補整について「私たちは、自分に割り当てられることのできた／すべの運命を考量してみた。広く眺め遣る目には／良いこと、あまり良くないことが／平然と、避けがたい順序で現われてきた」⁽⁷⁸⁾と詠っている。この詩において、「あまり良くないこと」には、当然、四年間に及んだ戦線での苦難が示唆されているのであるが、それをクレムは「悪いこと」あるいは「不幸なこと」とは言い表していない。クレムは、彼の人生に今や補整がもたらされることを望んでいる。それゆえに、戦争が終結した今、戦争中に彼の心を覆っていた虚無感に希望の光明を降り注ぐことを試みる。詩集『感動』には、以下に見るように、生の躍動を讃え、人生の可能性に期待し、広く人類愛を唱えた詩が多い。

「魂のなかで血は太陽のように上昇し／バラ色に赤く、熱くみなぎる／……／我々は心に世界を開く鍵を感じ取る／我々は、天使のみができるほどに近く身を寄せ合う」⁽⁷⁹⁾

「きみの中に幸運を掴もうという衝動があるなら／それを強く推し進めるのがいい／陰鬱な心は自ずと消えてゆく／けれども、陰鬱な心など力のかぎり追い払うがいい／一日が日没に傾くとき／何と多くのものが時間の胎の中で出番を待っていることか／地上がきみにとって狭くなる時／何と空はのび広がることよ！／きみは自由でいられるのだ。だから／きみを運んでいる自然の力について学ぶがいい／きみもまた一つの運動にすぎない／けれども、きみは平和を確信している」⁽⁸⁰⁾

「おまえがどこに立っていようとも、世界の半分は／おまえの前にあり、あとの半分はおまえの後ろにある／おまえははかなく、限りある／それゆえに、おまえは限りないものを捕えることはできない／けれども、身体は神にも似た光を放って／輝き立つ……／人類よ、おまえの腕に／不滅なものが花開く奇跡の故郷を抱くのだ」⁽⁸¹⁾

これらの生の希望を詠った詩では、おもに本稿のⅣのiii)で指摘された「降下や落下」を表す語(nieder-sinken, fallen, abwärts-fliegen)の出現とは対照的に、次に挙げるように、「上昇や飛翔」を表す語が数多く現われている。つまり、「万年雪の銀の冠がわきあがる」(auf-quellen)⁽⁸²⁾／「魂のなかで血は太陽のように上昇する」(auf-gehen)⁽⁸³⁾／「私は高い空に向かって伸びた」(hinauf-wachsen)⁽⁸⁴⁾／「空の肩帯が輝き立つ」(auf-leuchten)⁽⁸⁵⁾などと。

あの『人類の薄明』に、この終戦後に発行された詩集『感動』から、とくに「生の躍動」、「希望」、「人類愛」を詠った詩が8編も採り入れられたのは、それらの詩がそのアンソロジーの次のような理想主義的目標に合致していたからであると言えよう。つまり、「我々の絶望的な現在の上に、より良い未来の光のシグナルとして漂うドキュメントが、ここに集成されねばならない。精神は奥深く、また幅広く働こうとする。……我々はヨーロッパの戦場の廃墟を取り片付け、心と頭脳をもって新しい人間性を呼び起こす準備をしたい」⁽⁸⁶⁾と。

以上において、クレムの詩を第一次大戦以前から大戦終結までの時期的推移を辿りつつ、考察してきた。この結果、クレムの詩作は彼が直接、体験したあの「前代未聞の破局」と密接に関連していることが、いっそう明らかになった。これと共に、戦場や戦闘を描いた、いわゆる戦争詩がクレムの詩作活動において占める位置とそれのもつ意義をいくらか示すこともできた。しかしながら、ピントゥスは戦争詩について、「そこでは、詩人は手っ取り早く確認しながら、悲惨の事実を単調な順序で次々と並べる。その結果、その間断なく滴る暗い雫が我々の心を弱め、気力をくじいてしまう」⁽⁸⁷⁾と述べて、あの『人類の薄明』には、「マルヌ河畔の戦闘」以外に戦争詩を取めなかった。だが本稿において、戦争詩を分析的に考察する過程で、読む者の心に戦場を甦らせ、人間存在に懐疑を抱かせる戦争詩も、クレムの詩作の経過のなかで、人道主義を世界に呼びかける声に変化していることが明らかになった。詩人クレムは『アクツィオン』の発行者プェムファートやその他の行動主義の詩人とは異なり、「革命的な身振りを示したり、政治的な目標設定を試みる」⁽⁸⁸⁾ことはなかった。しかし、彼が書いた詩は、戦線に在った彼自身の外面的および内面的な状態を、まるで日記に記すように赤裸々に伝え、それに基づいて、「大地が自分から奪われているなら、自分のために一つの世界を創り出すという、人間の精神の可能性をふたたび開示すること」⁽⁸⁹⁾を努めた。実際、戦争の悲惨さを告発しつつ、人間の精神の在り方をつねに問いかけ、探り続けたクレムの詩作こそは、彼が二十世紀の人間と文学に成すことができた固有の貢献であったと言えるだろう。

註

- 1) Hans Bender : <Ein Dichter der „Menschheitsdämmerung“ — zum Tode von Wilhelm Klemm>. In : <Süddeutsche Zeitung> (1968. 1. 31).
- 2) Hanns-Josef Ortheil : Wilhelm Klemm — ein Lyriker der Menschheitsdämmerung, Stuttgart, 1979.
- 3) 正確には、『人類の薄明』の317頁に掲載されている W. ハーゼンクレーヴァーの『詩』は、4編の短詩で構成されているが、本稿では、これを1編の詩として数えた。
- 4) Kurt Pinthus : <Über Wilhelm Klemm>. In : Aufforderung, Wiesbaden, 1961, S.137.
- 5) ちなみに <Aktion> 6 (1916) Sp.116には、Klemm が行なったボードレールの詩の翻訳 <Seifenblasen> が載っている。
- 6) Jakob van Hoddis : <Tristitia ante...>. Kurt Pinthus (Hrsg.) : Menschheitsdämmerung, Hamburg, 1955, S.53.
- 7) Hanns-Josef Ortheil (Hrsg.) : Wilhelm Klemm — ich lag in fremder Stube, Gesammelte Gedichte, München/Wien, 1981, S.10. <Qualen>. (以下において、本書は W.K. : GG と略す)
- 8) W.K. : GG, S.9. <Verzweiflung>.
- 9) W.K. : GG, S.9. <Abendlied>.
- 10) W.K. : GG, S.8. <Der Bettler>.
- 11) W.K. : GG, S.7. <Melancholischer Abend>.
- 12) W.K. : GG. S.9. <Verzweiflung>.
- 13) W.K. : GG. S.10. <Qualen>.
- 14) W.K. : GG. S.10. <Müdigkeit>.
- 15) W.K. : GG. S.27. <Vor dem Krieg>.

- 16) Georg Heym : 1907年10月21日の日記, In : K.L.Schneider (Hrsg.) : Georg Heym. Dichtungen und Schriften, Bd.VI, Hamburg, 1960, S.500f.
- 17) W.K. : GG. S.11 <Aufforderung>.
- 18) Georg Heym : 1910年7月6日の日記, In : K.L.Schneider : op.cit., Bd.III, S.139.
- 19) Ernst Toller : Eine Jugend in Deutschland.In : Uwe Wandrey : Das Motiv des Kriegs in der expressionistischen Lyrik, Hamburg, 1972.
- 20) Fr.Nietzsche : <Menschliches, Allzumenschliches>, ibid. S.26.
- 21) W.K. : GG. S.12. <Sehnsucht>.
- 22) <Anrufung>, In : Thomas Anz und Joseph Vogl (Hrsg.) : Die Dichter und der Krieg — Deutsche Lyrik 1914—1918>, München, S.51.
- 23) W.K. : GG. S.107—113.
- 24) <Die Aktion> 4 (1914), Sp.834.
- 25) W.K. : GG. S.17. <Schlachtenhimmel>.
- 26) W.K. : GG. S.21. <Nächtliche Aussicht>.
- 27) W.K. : GG. S.22. <Vormarsch>.
- 28) W.K. : GG. S.16. <Abend im Feld>.
- 29) W.K. : GG. S.16. <Tot>.
- 30) W.K. : GG. S.28. <An der Front>.
- 31) W.K. : GG. S.17. <Schlachtenhimmel>.
- 32) W.K. : GG. S.19. <Schlacht am Nachmittag>.
- 33) W.K. : GG. S.20. <St.Marie à Py>.
- 34) Theodor Heuss : Die Kriegsgedichte von Wilhelm Klemm.In : <März>9, III (1915) S. 62 f.
- 35) Thomas Anz und Joseph Vogl : op.cit.S.240.
- 36) W.K. : GG. S.18. <Vormarsch>.
- 37) W.K. : GG. S.28. <An der Front>.
- 38) W.K. : GG. S.16. <Abend im Feld>.
- 39) W.K. : GG. S.20. <St.Marie à Py>.
- 40) W.K. : GG. S.22. <Spuk>.
- 41) W.K. : GG. S.24. <Hölle>.
- 42) W.K. : GG. S.32. <Winterquartier>.
- 43) W.K. : GG. S.37. <Betrübnis>.
- 44) W.K. : GG. S.41. <Herbst>.
- 45) W.K. : GG. S.18. <Sterben>.
- 46) W.K. : GG. S.34. <Gedanken>.
- 47) W.K. : GG. S.32. <Winterquartier>.
- 48) W.K. : GG. S.34. <Gedanken>.
- 49) W.K. : GG. S.32. <Der Abgrund>.
- 50) W.K. : GG. S.37. <Betrübnis>.
- 51) W.K. : GG. S.66. <Melancholie>.
- 52) W.K. : GG. S.63. <Blütenblätter>.
- 53) W.K. : GG. S.33. <Tristissimus>.
- 54) W.K. : GG. S.54. <Der Schwimmer>.
- 55) W.K. : GG. S.41. <Herbst>.

- 56) W.K. : GG. S.62. 〈Die Müdigkeit kehrt zurück...〉.
- 57) W.K. : GG. S.67. 〈Späte Dämmerung〉.
- 58) W.K. : GG. S.70. 〈Abenteuer〉.
- 59) W.K. : GG. S.79. 〈Frage〉.
- 60) W.K. : GG. S.39. 〈Programm〉.
- 61) W.K. : GG. S.65. 〈Vorüber〉.
- 62) W.K. : GG. S.38. 〈Wandlungen〉.
- 63) W.K. : GG. S.64. 〈Erinnerung〉.
- 64) F.T.Marinetti : 〈Supplement zum technischen Manifest der Futuristischen Literatur〉. In : Paul Pörtner : Literaturrevolution II, S.56.
- 65) Kurt Pinthus : 〈Der Lyriker Wilhelm Klemm〉. In : 〈Die Aktion〉7 (1917), Sp.461f.
- 66) Oskar Loerke : 〈Wilhelm Klemm : Aufforderung〉. In : Die Neue Rundschau 29 (1918), S.271f.
- 67) W.K. : GG. S.72. 〈Verse〉.
- 68) W.K. : GG. S.44. 〈Religion〉.
- 69) W.K. : GG. S.40. 〈Magische Flucht〉.
- 70) W.K. : GG. S.59. 〈Einleitung〉.
- 71) Franz Werfel : 〈Fremde sind wir auf der Erde alle〉. In : 〈Die Weißen Blätter〉 2 (1915), S.62.
- 72) W.K. : GG. S.51. 〈Philosophie〉.
- 73) Pinthus : 〈Über Wilhelm Klemm〉. In : Aufforderung, S.142.
- 74) W.K. : GG. S.55. 〈Weiter!〉.
- 75) Pinthus : Menschheitsdämmerung, S.351.
- 76) W.K. : GG. S.82. 〈Überlegung〉.
- 77) 〈Ausgleich〉. In : Menschheitsdämmerung, S.167.
- 78) W.K. : GG.S.80. 〈Ausblick ins Alter〉.
- 79) 〈Erfüllung〉. In : Menschheitsdämmerung, S.308.
- 80) 〈Einheit〉, op.cit.S.326.
- 81) 〈Ergriffenheit〉, op.cit.S.307.
- 82) 〈Ausgleich〉, op.cit.S.167.
- 83) 〈Erfüllung〉, op.cit.S.308.
- 84) 〈Reifung〉, op.cit.S.203.
- 85) 〈Bekenntnis〉, op.cit.S.144.
- 86) Paul Raabe (Hrsg.) : Die Zeitschriften und Sammlungen des literarischen Expressionismus, Stuttgart, 1964, S.184.
- 87) Pinthus : 〈Der Lyriker Wilhelm Klemm〉, op.cit.Sp.462.
- 88) Jan Brockmann : 〈Wilhelm Klemm. Betrachtungen〉. In : Horst Denkler (Hrsg.) : Gedichte der Menschheitsdämmerung, München, 1971, S.155.
- 89) Pinthus : 〈Der Lyriker Wilhelm Klemm〉, op.cit.Sp.462.

Wilhelm Klemms Lyrik — der Dichter und der Krieg

Sanae UKYO

Liest man Gedichte von Wilhelm Klemm, so liest man jene meist in der Anthologie der expressionistischen Lyrik »Menschheitsdämmerung«, in der 19 Gedichte von Klemm zu finden sind. Diese Tendenz läßt die Leser aber an ein gründliches Verständnis über Klemms Lyrik nicht herankommen, weil hauptsächlich Gedichte, die thematisch die Erweckung des Herzens und der Menschenliebe besingen, in die Anthologie aufgenommen wurden. In der vorliegenden Abhandlung werden Klemms Gedichte meiner Auffassung entsprechend, dem Wandel des Kriegs nachgehend analytisch untersucht und gezeigt, dass Klemms Gedichte im engen Zusammenhang mit seinen Kriegserlebnissen entstanden sind. So besteht meine Untersuchung aus den folgenden fünf zeitlich voneinander getrennten Abschnitten: I Vor dem Ersten Weltkrieg, II Vom Vormarsch nach Westen bis zur Schlacht an der Marne, III Kriegsgedichte, die um 1915 an der Front geschrieben wurden, IV Während des Stellungskriegs, V Nach dem Ende des Kriegs. In der Untersuchung wird aufgezeigt, dass sich Ausdrucksweise und Formen der Gedichte bei Klemm in engem Zusammenhang mit dem Kriegsverlauf geändert haben. Die Kriegsgedichte spielen eine wesentliche Rolle, aus Klemm einen pazifistischen und humanistischen Dichter zu machen. Um Klemms Lyrik zu verstehen ist es daher nachdrücklich zu empfehlen, vor allem seine Kriegsgedichte, die zwar in der »Menschheitsdämmerung« kaum enthalten sind, in der »Aktion« aber veröffentlicht wurden, aus dem geschichtlichen Hintergrund her zu interpretieren.